

不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

白川女 手拭の秘密

十月は三大祭の一つ「時代祭」が催行されます。他の二つにくらべると歴史こそ浅いですが、京都が都となった最初の桓武天皇と最後の孝明天皇が、現在のお住まいの平安神宮を出て、かつてのお住まいの京都御所へ戻られ、市内を巡察されながら再び平安神宮へお還りになる。その鳳輦の前後には明治から古代まで

時代を遡りながら各時代を表す著名人が当時の装束で現在の京都をお供する。時代を考証する力、装束を再現する技術、全市民が挙行に関わる実行力、どれ一つとっても京都ならではの得ない祭礼といえます。

装束は有名ですが、彼女たちが頭や首に巻いている手拭の隅に赤い三角の印があるのにお気づきでしょうか。この赤い三角、いったい何を意味するのでしょう。

これについて民俗学者の井上頼寿氏がとても興味深いことを書き残してくれています。彼の著書『京都民俗志』によると「白川女の（手拭）一方の隅を赤く染めてある。これは山で働くので「山の神様よ、これ以上は

いじめないでください。ごらんのようにこのように血がでていきます」の心であるという。というのです。

なんとあの赤い三角は血の象徴だったのです。もちろん神様がそんな小細工を見逃すはずがなく、また女性たちも神様をだまそうなどとも思っ

ていなかったでしょう。思わずクスリと顔がほころぶような愉快なオマジナイ。神様と人々の距離が今よりずっと近かった時代の微笑ましい互いの了解事のようになんとも羨ましい気がします。

それにしても白川女は平安貴族、大原女は建礼門院や後白河院、そして桂女は神功皇后と、まったくもって京都の働く女性たちの歴史の厚みと凄みには脱帽です。

(同志社大学嘱託講師 堤勇二)



時代祭・神幸列の白川女たち
鳳輦への献花を息がかからぬよう頭に「載く」

この時代祭で唯一現役の女性たちが参加するのが両鳳輦に献花の誉れを担う白川女です。花の里として知られた白川の地に住んだ平安時代の貴族・三善清行の進言で御所に献ずる習慣となったと伝えられ、江戸時代以後は市内を回りながら一般にも花や番茶を供するようになったようです。川端康成の『古都』でも効果的に登場するシーンをご記憶の方も多いのでは……。



頭に巻いた手拭の下に見えるのが問題の赤い三角印

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。京都を知ることには日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都
検定

京都観光文化検定試験
京都商工会議所